

(2) 指導にあたって

①サーキットタイム

毎時間のはじめに、その時間に練習する技につながる基礎感覚を養うことができるような運動を設定した。安定した前転や後転につながるよう

「ゆりかご」を、しっかりと手や腕、肩など上半身で体を支持することをねらい「かえるとび」「馬とび」「手押し車」、倒立技につながるような「川とび」「補助倒立」「倒立足入れ替え」などを行った。



②場の設定

一人一人の技能の習得や課題に応じて、補助具などがある易しい場や運動から、難しい場や技へとたくさんの場を設定した。単元前半は大きな前転・後転コース、跳び前転コース、半は、開脚前転・開脚後転コース、腕立て横跳び越し・側方倒立回転コースとコース設定した。

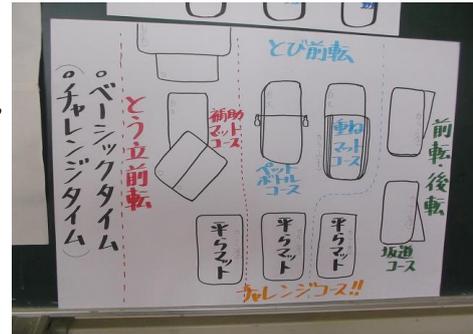
易しい場が成功したら、技の習得をめざし平らなマットでの技に挑戦するよう声をかけた。子どもたちは、ローテーションして場をまわる中でも、自分でコースを選んで何度も挑戦していた。

また、手を着く場所に手形のシートを置いたり、目線を意識させるために「目玉おやじ」の絵シートを置いたりして着手や視線について技をする側にも周りで見ている側にも意識でき、できばえについても分かりやすくした。

③アドバイスボード

単元の導入段階にマット運動の映像（動画）を見ることで、技の一連の動きのイメージを捉えやすくするとともに、よりよい動きのヒントを理解したうえで学習が進められるようにした。そして、基本技を進めていく中で、運動の仕方やコツをイラストにしたもの（「わたしたちの体育」から図を拡大したもの）をマットのすぐ近くに掲示し、技の習得のためのヒントとなるようにした。また、自分たちの技のできばえと比較させることで、ペアやグループ学習での教え合いや学び合いに活かせるようにした。

サーキットタイム:ゆりかご&倒立足入れ替え



重ねたマットコースでの倒立前転



ゴムを跳び越える跳び前転

3. 成果と課題

○子どもたちが意欲的に取り組むことができたのは、いろいろな場の設定ができたことが一因である。苦手感や嫌悪感を減らし、進んで場を選んで取り組むことができた。

○子どもたちの言葉がけやアドバイス等に活かせる擬音の言葉、子どもたちの目線に合ったものや実態に合った言葉など、簡単に技のコツやポイントを覚えられる分かりやすいものに改善していくことが必要である。技のコツやポイントを焦点化していくことも課題である。

○お互いの技を見合えるペア学習のさらなる充実（自分の課題をペアと共有することで、互いに技の視点が明確になり、言葉がけも活発になると考える）を図ることも課題である。

○低学年からの系統性（その学年で身につけさせたい力を明確化する）を再確認すること。